

白根市が平成3年8月15日に「非核平和都市宣言」を行ってから、今年で10周年。その宣言を受けて、市内の中学生に平和の尊さを知ってもらおうと、平成4年から非核平和研修が行われ、これまでに73人の中学生が広島に行きました。

今回10回目となる非核平和研修には、10人の中学生が参加。8月5日から7日までの3日間、中学生は4つのテーマに分かれて研修を行いました。そして8月11日に白根学習館で行われた非核平和都市宣言10周年記念事業の報告会で、それぞれのテーマで感じたこと、思ったことを発表しました。

広島平和祈念式典に参加して



野沢良太さん (新飯田中学校)

今から五十六年前の一九四五年八月六日、午前八時十五分、原子爆弾という史上最悪の破壊兵器が広島に投下されました。これは多くの人々に苦しみや悲しみ、そして絶望を与えました。

それから二年后、「広島平和祭」が毎年八月六日に行われるようになりました。その後「広島平和祈念式典」と呼ばれ、今年も五万人以上が式典に参加したそうです。式典が始まると、それまで騒がしかった会場が一瞬にして静まり、全員が壇上に集中しました。八時十五分に行われた黙とう。このとき鳴らされた平和の鐘が、半鐘のように聞こえ、戦争を経験したことのないものにもかかわらず、戦争の真実ただ中にあるような気がしました。広島市長による平和宣言。子ども代表による平和への誓い。平和というものをあまり意識していなかった僕に大きな衝撃を与えました。



沢田綾乃さん (庄瀬中学校)

八時にテレビで式典を見て下さい。そうすれば平和に対する考えが変わってくると思います。そして人間としてさらなる成長があると思います。僕は帰ってきてからいろいろ考えるようになり、本当にいい経験させてもらいました。

八月六日、広島平和祈念式典に参加しました。私は今までテレビなどでしか式典を見たことがなかったのですが、正直あまり興味を持てず、式典が終わったときに、私に何か一つでも気持ちに変化が起こるのだろうかと思いました。

当日は日本人だけでなく、外国人の参列者が多くて驚きました。式典が始まるにつれ、参列者全員の思いや願いが一つになった感じがしました。私自身の気持ちも変化しているのに気がしました。

八時十五分に黙とうが始まり、平和の鐘が鳴り響く中、私は当時の悲惨な広島が頭に浮かび、鳥肌が立ちました。もう二度と戦争が起こらないように、平和を強く祈りました。



滝沢郁名さん (新飯田中学校)

八月六日の朝、ホテルのテレビを見てみると、お年寄りの皆さんが参拝している様子が中継されていました。私はなぜこんなにお年

今回の式典参加で、たくさんのものを手に入れたような気がします。皆さん、これからは八月六日

八時十五分に黙とうが始まり、平和の鐘が鳴り響く中、私は当時の悲惨な広島が頭に浮かび、鳥肌が立ちました。もう二度と戦争が起こらないように、平和を強く祈りました。

さらに大きなものになりました。私たちがあの日の光景を、そして被爆者の気持ちを想像することしかできないけれど、世界から戦争がなくなるためにも、周りの人々に伝えていく必要があると思います。私一人の力で世界に呼び掛けることはできなくても、身近な人に話し、その人たちが平和を願ってくれば、この世界から戦争がなくなる第一歩につながると思います。そのためにも今回のこの体験を忘れず、自分でできることから始めていこうと思います。



明日香さん (白根第一中学校)

私は広島へ行く前に「はだしのゲン」で有名な中沢啓治さんのある一冊の本を読みました。それを踏まえて、三日目、被爆者の竹岡さんの話を伺いました。どの話し

被爆体験者の話を聞いて

寄りの人たちが多いのか不思議に思っていたら、アナウンサーがこう言っていました。「実際に被爆を体験された人の平均年齢が七十歳を超えている」。広島に原爆が投下されてからそんなに時がたつてしまったのかと思いました。

私は式典に参加して、数え切れない人とカメラの数を驚きました。今年はいつもとより外国人の数が多く、世界中の人が平和な日を訪れることを願う式典だと、私は感じました。一番心に残っていることは、子ども代表の平和の誓いの言葉で、「平和を願う心の輪を世界に広げるよう努力する」という言葉には、私も一緒に何かしたい気持ちになりました。

そして一分間の黙とうの中で、私はたくさんのお話を聞きました。私も自分が五十六年前、広島に

いたら、また五十六年前の出来事があったら世界はどうなっていたのか、今私たちが普通に生活しているこの時間がどんなに大切なもので、素晴らしいものなのかをこの式典で教えられました。

「原爆の子の像」と名付けられた佐々木貞子さんの像には、数多くの折り鶴が置かれていました。これだけ多くの人たちが平和を望んでいるんだと、あらためて知ることができました。一方で原爆投下の日や時刻を正確に答えられない広島の子どもたちが年々多くなっているの聞き、これは日本人全体の問題だと私は感じました。

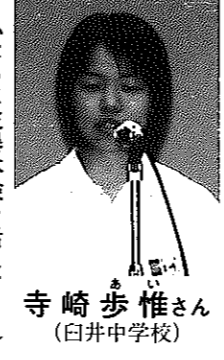
世界中から核兵器がなくなり、人類が助け合って未来を開くことができるよう、私も努力していきたいと思えます。



被爆体験を語る竹岡さん

竹岡さんは今日まで、一生懸命一日一日を生きてきたそうです。そしていろいろなところを渡り歩き、平和へのメッセージを伝え続けています。しかし、世界の至る所では、戦争や紛争がまだまだ続いています。核も存在します。どうしてでしょうか。被爆をされた人はもちろん、世界の誰もが平和を願っているはずですが、

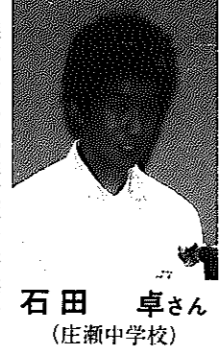
平和な世界へ一歩でも近づけるために、私にできることはなんだろうと考えました。それはまず、この三日間で感じたものをあつらひのままに伝えること、そして戦争の恐ろしさ、命の尊さ、最後に平和が、一番だと思ふまで分かち合えたらいいなと思えます。



寺崎歩惟さん (白井中学校)

私たちに被爆体験を話してくれた竹岡さんは、当時十七歳でした。五十六年前、八月六日の朝、友人と遊ぶ約束していた竹岡さんは、家を出たときに被爆されたそうです。空は真っ黒になり、広島はまじまじと朝焼けの原野になりました。朝だというのに、辺りは暗く、黒い雨が降りまわりました。人々は人間だというのが分からないほど真っ黒になり、川には体がパンパンに膨れ上がった人々が浮かんで亡くなっていました。

今までも戦争については、写真や本などを見て知っていましたが、実際に広島に行き、広島のまじまじと朝焼けの原野を生々しい被爆品を見て、そして竹岡さんの話を聞いて、原爆の恐ろしさが、



石田卓さん (庄瀬中学校)

私は三日間の非核平和研修で印象に残ったのは、被爆体験者から聞いた被爆体験談です。

その体験談は竹岡さんという女性が話してくれました。竹岡さんは当時十七歳でした。原子爆弾が投下されて、爆心地から三キロも離れている竹岡さんの家にも被害が及んだのです。それは家が傾いたり、家の前の坂の下では人がやけどをして黒こげになったりして、とても悲惨なものだったそうです。

竹岡さんは母親を捜すため、焼け野原を歩き回ったことを話してくれました。僕は頭の中で、人の



竹岡さんの話に耳を傾ける中学生たち